

# 思親閣より秋をたづねて

松 井 桓 成

今年十月の初旬、吾等は身延山奥之院の斷崖の絶頂に草を藉いて、富士川を眼下に瞰下してゐた。紫褐色の鷹取山、天子ヶ岳等に依つてぐるりと屏風を立廻された身延の谷は摺鉢の底のやうだ。青緑色の身延川が、前日の雨で黄く濁つた富士川に注いでゐる。群山を踏まへて富士が一峰孤立してゐる。四合目あたりまでは銀よりも白い雪に山膚を被れ、雪色清くして四圍の大景に眼睛を点ず……と期待したが、意外！それはまだ冬の装ひにかゝらぬ桔梗色の姿だつた。古來幾多の英雄佳人は様々な思ひを抱いて、あの富士を眺めつゝ通つて行つたのを思ふと、屹然として高く雲表に聳えてゐる山の姿に憧れずには居られない。あげ雲雀の影も見えなければ、薄霞も這ふてゐない、空氣は一段と澄んで、谷一帯が一種の沈靜に入つてゐる。祖師堂、山門、仰ぎ見る大廈高樓もいろ／＼の人々が右往左往する華やかな且つあわたゞしい街も皆、吾眼下に展開されてゐる。そこに醜惡なる人間の聲は絶えて聞

えない。唯もう滔々たる水の流が、變化磨滅する事がない永遠不滅の相を示してゐる——と思ふと、何だか神聖な感じが骨の髓に浸み入るやうだ。天高く馬肥ゆるの秋！『吾等の志をして天の如く高く吾等の心をして氣の如く清からしめよ』と秋の風物が吾等に促してゐる。ふと見ると遙か左手に、吾等の目よりやゝ低く、一羽の鳥が應揚に曲線を描いてゐる、鷹だらう。

かうして闌の秋の豁然とした天地を見渡して、胸の中が廣々として來た時、快感の背に凋落の哀れが襲ふて來る。そのカラツとしてゐるのは、自然が衣をぬがせられ、あらゆる裝飾を取り去られて赤裸々な様を示したものだ。狐色した枯草に暖い日がさした西谷は小春日和だつたが、此處に滿る陽の光は、もう暑くも又さして暖くもなく、夏装ひの吾等には、うすら寒さが感ぜられた。

九個年が間、五十余町の此の嶮山を日毎に一度は必ず攀登つて、遙か房州を煙波の間に望み、父母の恩を拜謝せらるゝ聖者の影——八十一歳の老母を伴ひて至孝の跡を偲ぶ雅人元政の姿——吾等は時と歴史との背景に立つて、金剛不壞に、どつしりとした迷の無い、莊大な力強さを以て、天を直指して直立してゐる、巨大な御手植の老杉に、無限の思慕と憧憬の念を禁じ得なかつた。五月雨月の思親閣は、庭の若葉は日光に輝き、近くで山鳥が春を唄ひ、誦經の聲も朗かに木鐘の音と共に御堂に響いて、長閑な春の抒情に溢れてゐた……がそれも今は淡い過去の幻影と消えて、元政櫻は紅ずんでハラ

く落ち、御堂はひつそりと静まり返つて、居所を問ふ堂守の聲も淋しく、落葉を踏む足音のみがザクザクと、荒涼の景は目に満ちて、肅殺の氣がひたくと吾等の肌に迫つて來る。やがて不斷の手向を松嶺に託して、黒門を一路追分へ下つた。

樹林の間にチラ／＼と局面の變化するのを樂しみ乍ら……程なく吾等は思親橋の上に立つた。南アルプスの連嶺にもまだ白いものが見えない。腰から上を鼠色の流雲に覆はれて、七面山は低く見える。クッキリとした樅を通して薄煙る山腹に默在する苦屋の閑寂な眺めは、大觀の畫を見るやうだ。杉の中から高く抜き出て、白く骨のやうに立枯したのは、狼に食はれた麒麟の死骸のやうに、一層哀傷をおぼへる、道は殆ど平坦になつた。頭の上のアケビの茂みから紫の繭形の顆が、葉隠に嬌乎々々として笑つてゐる。吾等の心は子供の昔にかへつて、嬉々としてもぎ落して貪つた、種子が多過ぎて物足りない心持がする。併し谷間にとつては秋の唯一の産物である。秋は悲愁ではあるがその萬物を豊熟させる精神は、人の樂觀を喚び起すべきものではないか。戯れ乍ら追分に辿り着いた。先客の籠からは土附いた初茸が顔を出し、土間でも初茸を取圍んでゐる。早速蓑附の馳走に舌づゝみを打つた。盛りものだけに、肉も厚く、香氣も高く、山厨の佳味實に侮るべからざるものがある。こうした豊かな秋に満足して靜かに落付いてゐる人達の生活が何となく雅やかに思はれた。再び足に委せて赤澤の方

へ。谷田には蕎麥が雪のやうに、花を持ち崖にはすゝきが銀絲のやうに、紅絹のやうに、風に戦いて孤立叢生、實に人の詩思を索き動かす。岩根々々に黄、白の野菊が咲いてゐる。培養菊が水道の水に磨かれた娘なら、野菊は山出しのうぶの乙女だ。町の乙女が空駕籠を連れて下つて來た。駕籠に草臥て草鞋が戀しくなつたのだらう。『箱根山駕籠に乗る人擔ぐ人其又草鞋を作る人』口ずさみ乍ら金剛杖を打振ふ。或は天も鳴れと高らかに唄ひ乍ら。足下に赤澤が瞰える處で踵を返した。

追分から折れて西谷へ……途中千本杉で採つた初菘を山土産に遠く下の方で谿流の響を聞いたのはもう夕暮に間もなかつた。